

書評

[評者]

押川勝太郎

宮崎善仁会病院腫瘍内科/宮崎がん共同勉強会・理事長



Dr. 大津の誰でもわかる 医療用麻薬

選べる・使える・説明できる

大津秀一 著

● A5 頁 172 2017年6月

定価：本体 3,400 円＋税

[ISBN978-4-260-03038-0]医学書院刊

最初に本書の推薦理由を述べる。

- ・非専門家でもすぐに使える具体的処方例の例示
- ・単なる処方ではなく、患者さんへの教育と試行錯誤が苦痛緩和につながり、医療者とのコミュニケーションを良好にするという視点
- ・患者さんの納得感を得る説明をするために、最低押さえておくべきがん疼痛の理屈と、医療者が把握しづらい患者さんの心理パターンの紹介
- ・全項目がQ&A形式であるため、知りたい情報にすぐにたどり着ける

今のがん治療において、医療用麻薬をがん性疼痛に使うことは常識となっており、これなくしてがん治療を全うすることは考えられない。緩和ケア継続教育プログラム「PEACEプロジェクト」のおかげで、非専門家でも医療用麻薬の使用が身近になったといえる。しかし、多系統のオピオイドと多彩な剤型が続々と登場することで、その進歩についていくことはかなり困難になってきた。実際、新規フェンタニル即効剤は、フェンタニル徐放剤のレスキューにはそれほど向いていないといったことなど、非専門家にとっては意外な事実を本書で知った。

一方、罹患するまでがんに縁がなかった一般の方々は、商業主義に沿った報道などで、医療用麻薬に対する誤解が根深く残ったままとなっている。私は終末期医療までかかわっている腫瘍内科医でありながら、患

者会のNPO法人も主催している。その際によく聞かれる患者さんの誤解の三本柱は「余命」と「抗がん剤」、そして「医療用麻薬」だ。早期からの緩和ケア導入により、終末期の無理な積極的治療を避けることができ、予後改善につながるとの報告があった。そのためには抗がん剤の本当の意味を、時間をかけて患者さんに理解してもらう必要があるが、医療用麻薬においても同様の原理が働く。

本書の特徴は、緩和医療の目標である苦痛緩和の先、つまり患者さんの納得感を得るために、なすべきことはなにかという視点が根底にあることだろう。例えば、オキシコドン投与で疼痛緩和ができたものの、あとで患者さんからの強い減量希望が出てきたとき、やみくもに理論で説得するのではなく、いったん要望を受け入れる。その後、減量による苦痛増大のデメリットを実感できたら、それをきっかけとしてお互いの意思疎通を良好にさせるといったユニークな提案もある。

患者さんの心理面にここまで配慮した類書は少ない。さらに、患者さんやその家族の自己学習に耐えうるよう配慮された文章の平易さがあるため、医療者と共通の理解を得たい意欲的な一般の方々にも推薦できる。緩和ケア領域においても、患者さんの自己学習を促し、医療者と同じ理解が期待できるような書籍が登場したことを心から喜ぶたい。